

第16回全国銀行大会における総裁講演要旨

本日、第16回全国銀行大会が開催されるにあたり、いささか所見を申し述べる機会を得ましたことは、わたくしの深く喜びとするところであります。

顧みますに、わが国経済はここ数年来まことにめざましい発展を遂げて参りました。申すまでもなく、経済の発展に努め、国民生活の向上をはかることは、経済政策の究極の目標であります。しかしながら、経済活動が一国経済の実力をこえた拡大に走るならば、かえって、発展の基盤がそこなわれる恐れなしとしないのであります。現に、昨春ごろからそのようなきざしが顕著となったのでありまして、昨年の本大会の席上におきましても、とくにこの間の事情を詳細に申し述べ、皆様とともに経済の運営に誤りなからんことを念願した次第であります。しかしその後も、いわゆる経済成長を謳歌する風潮の中に、設備投資と生産の増勢はむしろ強まり、物価の高騰と国際収支の大幅な逆調を招くに至ったのでありまして、これを未然に防止しえなかったことは、金融政策の衝にあたるものとして深く遺憾に存ずるところであります。

(当面の景気動向)

このような情勢に対処しまして、昨年半ば以降金融引締めを強化したのでありますが、最近その影響は、かなり広範にわたって浸透をみております。商品市況は軟調の度合を深めており、生産や設備投資を調整する動きも、強まりつつあるよう

に見受けられます。またこれを背景として、国際収支面においても、ひとところに比べれば、かなりの程度まで改善の傾向がうかがわれるようになりました。このような動きを、今後いっそう本格的な歩みとして固めて参ることが、当面の課題であることは申すまでもありません。

しかしながら、景気調整の前途や国際収支の先行きにつき、安易な期待をもつことはなお慎まねばならないと思われます。外貨準備高はたしかに回復をみておりますが、その一部は昨年来の外貨借款によってきさえられているものであり、今秋以降その返済期が到来するという事情を忘れてはなりません。目先き貿易事情が改善をみつめるとはいえ、輸入の前途は、今後における生産調整の本格的な進展いかにかかるところが大きいと思われる。また、最近における輸出の増加は米国向けに集中しているのでありまして、しかもその中には、金繰りその他からするかなり無理なものが見受けられます。今後輸出の推移を考えるうえで看過できないところであります。

他方、海外の環境をみますと、欧米各国の景気動向については、目先きはともかく、先行きあまり楽観を許さないものがあるように思われます。それに加えて、米国におけるドル防衛の強化や、EEC諸国の競争力の増大などもあり、国際環境のきびしさは一段と深まる情勢にあります。前途には、なお気を許しえないものがあると感ずるゆえんであります。

(経済発展の基礎固め)

さらに一步進んで、やや長期的観点に立って考えます場合、今回の景気の行き過ぎから、われわれが従来経験したことのない幾つかのむずかしい問題が生じたように思われます。その第1は、消費者物価の急騰であり、しかも、それが労働需給のかつてない引締めを背景として現われた点であります。当面、卸売物価は引締めの影響で徐々に低落に向かっていますが、消費者物価をも含めた総体としての物価水準を安定させることは、これまでにない多くの困難を伴う課題となって参りました。これは、とくに国民大衆の貯蓄の根底に触れる事がらであるだけに、ゆるがせに出来ない問題であります。

第2の問題は、企業のコストや採算という観点からみまして、経営基盤に注目すべき変化が生じつつある点であります。これには、労務費の上昇が強く働いているのでありますが、同時に、地価や建設費の高騰という事情などが加わり、資本費の負担が過重となってきたことも、看過出来ない最近の傾向であると存じます。わが国商品の国際比価は、ここ一兩年の好況によりしだいに悪化をみたのでありますが、その背後において、コスト面の圧迫が漸次強まり、長期にわたる着実な輸出増伸の基盤に変化が生じはじめていることは、否定しがたいと思われます。近年の著しい設備拡張の結果、一部には過剰化の懸念も徐々に深まっている際に、コストを調整し採算を維持して参るには、並々な困難が伴うのは当然であります。しかしこれを克服しなければ、新しい発展の基礎固めは成就しがたいのであります。

(当面における金融政策の基調)

以上、最近の物価やコスト情勢を中心に、わが国経済が直面している事態につき申し上げましたが、これらはすべて通貨価値の安定につらなる問題であります。同じく通貨価値の安定と申しましても、従来に比して、はるかに複雑かつ困難な面を含むに至っております。しかもわが国は、いよいよ貿易の自由化を大幅に推し進め、世界市場における自由な競争に積極的に参加する時期に際会しております。このように、日本経済は、内に芽ばえている問題といい、またわが国をめぐる環境といい、多くの点で新しい局面を迎えつつあるものと申さねばなりません。

当面における国際収支の改善はもとより大切なことではありますが、同時に、コストの調整をも含めた広い意味における通貨価値の安定を通じて、新しい発展の基礎をつちかうことは、いよいよ切実な課題となって参ったと存じます。引き続き景気調整を推し進め、少しでも早く経済全般の歩みを整えることが、将来の停滞や大きな反動を避け、新しい経済発展をもたらすゆえんであります。引締めの浸透に伴い、一部に困難が生ずることもある程度予想されるところではありますが、これを安易な方法によって回避しますと、景気調整の歩み全体をはばむ恐れなしとしないのであります。

このような見地に立ちまして、諸般の動向には慎重な考慮を払い、無用の波乱を防止しつつも、当面、金融引締めの基調はこれを堅持して参る所存であります。

(経済運営の規律の確立と金融の正常化)

次に、今日の経済情勢をもたらした事情につき、

若干反省を加えてみたいと存じます。そもそも自由経済の健全な運営のためには、通貨、金融に関する節度が保たれ、おのずから規律が貫かれていることが、基本的な前提となるものと申さねばなりません。金融機関ならびに一般企業の活動が、それぞれの自由にゆだねられているということは、取りもなおさず、広い意味の市場の規律に従うということにはかならないのであります。

しかるに今日では、このような当然の原則が軽んぜられ、産業界の仕ぶりは、ともすると量的な拡大を競うことに偏しがちであります。これには企業のあり方や、いわゆる成長政策をはきちがえた安易な経済観など、種々の原因をあげることができます。しかし率直に申しまして、投資活動の行き過ぎは、そのための資金的な裏付けが行なわれたからこそ可能となったのであります。事実、ここ一兩年の経過を顧みます場合、金融機関がややもすれば資金の需給関係を軽視して貸出競争に走り、あるいは、安定的な貯蓄の範囲をこえる証券の発行が行なわれたことは、争いがたい事実であります。このようにして、金融市場の運営に欠けるところがあったことが、景気過熱の一因となったのでありまして、この際、反省を要するものと思われまふ。

もとより、金融機関並びに一般企業の節度ある行動をささえ、これに基準を与えるために、金融市場の機能を整備する必要があることは、いうまでもありません。最近、行政指導とか自主調整など直接的な規制により、設備投資の抑制や物価の安定をはかろうとする考え方も少なくないのですが、このような規制も、自由経済運営の正

常な機能を尊重し、これと相補うことによって、はじめてその効果をあげうるものであることを忘れてはなりません。このような意味におきまして、諸般の金融正常化を推し進め、金利機能を生かす仕組みを整えることが、自由経済の本筋を確立し、その健全な基礎を固める根本であると信ずるのであります。この点、わたくしども、各位と相携えて、今後必要な施策につき鋭意検討を進めて参る所存であります。

(銀行に対する要望事項)

次に、この機会におきまして、銀行界の各位に対し、若干の希望を申し述べておきたいと思ひます。

その第1は、金融機関におけるサウンド・バンキングの確立についてであります。わたくしは、このことを毎年強調してきたのでありますが、最近借入依存が一段と強まる実情にあることは、軽視しえない点であります。オーバー・ローンの激化については、その直接の原因として、大幅な財政資金の引揚げとか、通貨の増発といった理由があることは申すまでもありません。しかしそのこと自体、ある程度までこれに先行した銀行貸出の行き過ぎと、これによる急激な経済拡大の結果でもあります。その意味では、やはり、健全経営の原則にのっとり、堅実な貸出態度と資産の流動性保持に徹していただきたいのでありまして、それが安易な借入依存を是正するゆえんと考えます。なお、最近とくに積極化をみている短期外資の導入は、単に資金繰りの困難を一時糊塗するものにすぎず、かえって景気調整の円滑な進展を阻害するものであります。そのうえ、対外信用を著しく

傷つける恐れが少なくないと考えられますので、
誠に自粛されんことを望む次第であります。

健全経営の問題に関連しまして、銀行におかれ
ては、産業界に対し自主的態度を堅持されるよう
お願いしたいと存じます。個々の業界や企業にと
って必要とみられる資金であっても、その供給に
ついては、あくまで銀行が自らの資産内容や資金
事情を考慮して、自主的に決定することが望まし
いのであります。金融機関に対しては、その活動
にあたり、公共的利益への配慮が要請されるところ
であります。銀行の融資態度の基本は、自らの
企業としての健全性を保つことにあると存じま
す。そのような自主的な態度があってはじめて、
銀行は真に国民経済の健全な発展に寄与しうるも
のと考えるのであります。

第2に、この際貯蓄の重要性について、一言申
し述べておきたいと存じます。ここ数年、貯蓄を
軽視する風潮が一部にみられるのでありますが、
資本蓄積の不十分なわが国の現状では、このよう
な考え方はとるべからざるものであります。もと
より貯蓄の増強には、通貨価値の安定が欠くこと
のできない条件でありまして、この点について
は、さきほども申し上げましたように、各位とと
もにあらゆる努力を払って参る所存であります。
なお、昨年来、銀行預金と証券貯蓄との間に、若
干の混乱と摩擦がみられたのでありますが、両者
はそれぞれ独自の役割をもつものであり、この
際、銀行界と証券業界とは相携えて、貯蓄の増強
に努められたいと存じます。また預金吸収にあた
っての金融機関の態度は、あくまでも規律を重ん

じ、公明であることが切望されるのであります。

(むすび)

以上申し述べましたように、今日、わが国経済
は困難な事態に当面しているのでありまして、政
府におかれても、経済の歩みを安定した姿に復す
よう種々努力を払われていることは、同感を禁
じえないところであります。いわゆる経済計画
が、自由経済のもとにおいてもそれ相応の役割を
持つことは、申すまでもないのであります。しか
し、その時々々の経済情勢に現われる循環的な景気
の動きに対しては、十分かつ適切な考慮を払うこ
とも必要でありまして、これは経済計画となんら
矛盾するものではないと存じます。

最近の歩みをみても明らかなように、わが国経
済は、基本的には旺盛な発展の時期に際会してい
るのであります。当面する困難も、そのような日
本経済の現状に対する対処の仕方において、必ず
しも適切でなかったことによるものと考えられま
す。わたくしどもが当面努力しておりますこと
は、急ぎすぎた成長に一時休息を与え、日本経済
の潜勢力が、再び安定した形で発露される基盤を
固めようとするものにほかなりません。安定と成
長は相いれないものではなく、安定の上に立って
はじめて健全な成長はありうるということが、戦
後におけるわたくしどもの体験であったのであり
ます。

幸い、金融界をはじめ各界の御協力を得て、景
気調整の成果があがり、経済の発展が再び本格的
な軌道に乗る日の早からんことを祈念して、御挨拶
を終わりたいと思います。

(昭和37年7月9日)